様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月 ３１ 日現在

機関番号：６２５０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｈ０２４４０

研究課題名（和文）朝鮮海出漁の歴史とその文化的影響の研究―イワシをめぐる韓国の民俗変化

研究課題名（英文）A study on the history of fishing by Japanese fishermen in the sea near the Korean peninsula -changes of Korean life culture related to sardines

研究代表者
松田　睦彦（MATSUDA, MUTSUHIKO）

国立歴史民俗博物館・大学共同利用機関等の部局等・准教授

研究者番号：４０５５４４１５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　11,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は以下の３点である。Ⅰ.イワシを追った朝鮮海出漁の背景と実態解明。Ⅱ.朝鮮海出漁が朝鮮半島の人々の生活文化に与えた影響の解明。Ⅲ. 日本と東アジア諸国との新たな生活文化研究の枠組みの提示。Ⅰについては、瀬戸内海を中心とした漁民の出漁の実態について具体的に明らかにした。Ⅱについては、韓国人研究者の協力のもと、朝鮮半島における漁撈技術や食文化の変化の様相を明らかにした。Ⅲについては、植民地という状況が文化の混交を引き起こし、その影響が現在にまで残ることを具体的に示した。それにより、一国あるいは地域の文化を広域的な影響関係の下でとらえることの重要性を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、これまで政治外交史や経済史が中心であった日朝（韓）関係史に漁民という庶民の歴史を加えてその実態を明らかにするとともに、漁民の出漁がもたらした技術を含む生活文化の混交の様相をとらえた点において大きな学術的意義があった。また、こうした手法が日朝関係史のみならず、他の国や地域との関係をとらえる上でも有効であることが示された。こうした成果は、日本民俗学会と共催の国際シンポジウムや、韓国国立民俗博物館と国立歴史民俗博物館の共催の企画展示において社会に還元され、日韓関係の悪化する中にあっても、学界や社会から前向きな評価を得ることができた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is the following three points. Ⅰ. Elucidation of the background and actual conditions of Korean sea fishing following sardines. Ⅱ. Elucidation of the impact of the fishing by Japanese fishermen on the living culture of the people of the Korean Peninsula. Ⅲ. Presenting a new framework for life culture research between Japan and East Asian countries. Regarding I, we clarified the actual situation of fishermen's fishing mainly from the Seto Inland Sea. Regarding II, with the cooperation of Korean researchers, the aspect of changes in fishing techniques and food culture in the Korean Peninsula was clarified. Regarding III, it was concretely shown that the colonial situation caused a mixture of cultures and its influence remains to this day. It emphasized the importance of understanding the culture of a country or region under wide-area influence.

研究分野：民俗学

キーワード：朝鮮海出漁　カタクチイワシ　マイワシ　煮干し　国際企画展示

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

現在の韓国には日本の植民地支配の影響が色濃く残っている。なかでも生活文化については、日本による植民地支配の文化的影響を研究する題材として、民俗学的に重要な位置を占めると考えられるが、これまで、日本の植民地支配が韓国の生活文化に与えた影響を検証する作業は積極的には進められてこなかった。その背景には、日本の研究者にとっては旧植民地を題材とする研究が敬遠されてきたこと、韓国の研究者にとっては「植民地収奪論」と「植民地近代化論」の二項対立の陰で、生活文化の実際に対するまなざしが育まれにくかったことがあると考えられる。そうしたなか、研究代表者は、日本の研究者が韓国の人々の心情に配慮しながら、韓国に残る日本の文化の調査に真摯な姿勢で着手すること、そして、韓国の研究者が「植民地収奪論」と「植民地近代化論」の二項対立を乗り越え、みずからの文化の現状を見つめる作業に踏み出すことが必要であると考えた。

その具体的な実践として、本研究では日本人漁民による朝鮮半島沿岸への出漁、とくに多くの日本人漁民がたずさわったカタクチイワシおよびマイワシの漁獲をめざした出漁を取り上げ、その歴史と、朝鮮半島の人々の生活に与えた文化的影響を明らかにすることとした。日本人漁民によるカタクチイワシ漁は朝鮮半島南部を中心に韓国併合以前から行われており、漁獲は煮干に加工されて日本のみならず、満州や上海等に輸出された。一方のマイワシの漁は漁船が大型化する大正期以降に朝鮮半島東岸で盛んになる。漁獲は魚油や肥料に加工され、外国にも盛んに輸出された。マイワシの漁業基地となった沿岸の町には大規模な油脂工場が整備された。こうした日本人漁民の活動は、朝鮮半島の漁業に技術的な変革をもたらしただけでなく、魚の嗜好や調理方法等、さまざまな分野に影響を与え、その影響は今日の韓国でも確認することができる。

こうした背景から、研究代表者は、日韓の研究者の協業のもと、韓国の漁業の現場や日常生活に刻まれて今も残る日本人によるイワシ漁の痕跡について、当時の記録の分析やフィールドワークでの調査をもとに明らかにすること、そして、イワシをめぐる朝鮮海出漁の実態について日本の漁村に残る記録や聞き取り調査から復元することの重要性を強く感じていた。

２．研究の目的

本研究では、明治中期から第二次大戦終結まで日本人漁民によって行われた朝鮮海出漁を、日本の文化の朝鮮半島への移入の歴史ととらえ、その経緯と現代の韓国の生活文化に残る影響を明らかにすることを目的とした。

具体的には、魚油や肥料、煮干の原料として、経済・軍事・生活などの面で重要な位置を占め、朝鮮半島の生活文化に変革をもたらしたイワシをめぐる出漁を取り上げ、Ⅰ．イワシを追った朝鮮海出漁の背景と実態と、Ⅱ．朝鮮海出漁が朝鮮半島の人々の生活に与えた影響について、文献資料や現地で採集された記録・語りから明らかにする。さらに本研究は、イワシをめぐる韓国の現在の生活文化の観察を起点とすることで、「植民地収奪論」や「植民地近代化論」に回収されない、Ⅲ．日本と東アジア諸国との新たな生活文化研究の枠組みの提示をめざした。

３．研究の方法

本研究はⅠ．イワシを追った朝鮮海出漁の背景と実態については、朝鮮海出漁の中核をになった瀬戸内海の漁村、広島県坂町および香川県観音寺市伊吹島を調査地に設定し、A.出漁母村の在来漁業とイワシの利用、B.朝鮮海出漁の実態、の 2 点について、文献資料や現地に残された記録、聞き取り調査で得られた情報から歴史的に明らかにすることをめざした。一方、Ⅱ．朝鮮海出漁が朝鮮半島の人々の生活に与えた影響については、A.朝鮮半島在来のイワシ漁とイワシの利用、B.日本の漁撈技術の受容とその現在、C.イワシをめぐる生活の変化の 3 点について研究をすすめた。A ではマイワシとカタクチイワシそれぞれについて、韓国における先行研究と現地での聞き取り調査をもとに復元すること、B.では日本のイワシ漁の技術がいかに現地の漁業者に定着したのかを文献資料や現地調査をとおして考察すること、C.では現在の韓国で一般的なイワシの加工法や調理法を韓国在来のものと比較して明らかにすることをめざした。

ただし、補助金減額への対応のため、マイワシよりもカタクチイワシの利用を中心として調査・研究を進めることとした。また、2020 年 3 月から世界的な流行をみた Covid-19 の影響から、最終年度は国内、海外ともに現地調査を行うことができなかった。そのため、研究期間を 2021 年まで延長したが、Covid-19 は終息せず、この年もかろうじて国内調査を行うにとどまった。

４．研究成果

本研究は学術論文 17 本、学会発表 18 本、図書 2 冊、国際研究集会の開催 1 回、博物館における展示 1 回という成果に結びついた。おもな成果について、研究目標との関係で整理すると以下のとおりとなる。

Ⅰ－A：出漁母村の在来漁業とイワシの利用

日本各地におけるカタクチイワシ漁の技術や、カツオ一本釣り漁のエサとしての利用についての調査研究が川島秀一によって進められ、その成果が「カツオ漁とかつお節の歴史と民俗」（2018）等の論文や講演会において発表された。また、出漁母村の漁業については、本研究の主要調査地である香川県観音寺市伊吹島および広島県坂町横浜の実態を磯本宏紀が「朝鮮植民地期の日本人漁業経営の実態と展開－香川県観音寺市伊吹島、広島県坂町横浜出身の漁業経営者を対象として」等の論文において詳細に明らかにしている。さらに、イワシ漁や朝鮮海出漁に使用された漁船について、昆政明が熊本県八代市等における実測調査を行った。その成果については未発表であるが、今後、朝鮮半島や中国大陸の船との比較の視点から分析し、結果が公表される予定である。

Ⅰ－B：朝鮮海出漁の実態

朝鮮海出漁の歴史的背景について、松田睦彦が調査研究に取り組んだ。とくに論文「明治 16 年『貿易規則』以前の朝鮮海出漁」（2020）では、近代の出漁が近世の対馬出漁の延長線上にあるという視点が提示された。また、日朝間の外交的側面にも注目し、「朝鮮国に於て日本人民貿易の規則」（1883）や「日本朝鮮両国通漁規則」（1889）の締結といった通漁環境の整備の過程を明らかにする論文も準備中である。一方、磯本は前掲論文等において伊吹島および横浜の朝鮮海出漁の実態を明らかにしており、松田も「名もなき人々の小さな日韓関係史－瀬戸内漁民の朝鮮海出漁」（2021）において、愛媛県上島町魚島の朝鮮海出漁について、当時の様子を描いた画幅を素材として論じている。

Ⅱ－A：朝鮮半島在来のイワシ漁とイワシの利用

朝鮮在来のカタクチイワシ漁について、松田が老大島、欲知島、巨済島といった朝鮮半島南海の島嶼部での現地調査および植民地期に日本人によって作成された記録から「カタクチイワシをめぐる日韓漁撈文化の混交に関する予備的考察」（2017）において明らかにしている。また、韓国人研究協力者の呉昌炫が「韓国南海のカタクチイワシ漁」（2018）においてテフェンカン島の伝統漁法であるナンジャン網について報告した。

Ⅱ－B：日本の漁撈技術の受容とその現在

上記の松田（2017）および呉（2018）においても、日本から伝わり、現在の漁法にもその名をとどめる権現網について報告されているが、その漁法の受容についてより具体的に検証したのは呉昌炫の学会発表「カタクチイワシから見た 20 世紀韓国人の日常生活の変動－韓国におけるカタクチイワシ漁業技術と消費方式の伝播と受容」（2018）である。一方、日本人漁民が使用していた和船と、韓国人漁民が使用していた船との技術的融合を論じたのが昆政明の学会発表「日韓造船技術の混交」（2018）等である。昆は朝鮮半島南海で使われた漁船、トングミンペの実測調査をとおして、朝鮮の在来漁船と和船との技術的混交の様相を具体的に明らかにしている。また、技術ではないが、日本人漁民が持ち込んだ大漁旗の文化が、現在も韓国風に変化しながら定着している様相について、韓国人研究協力者の鄭然鶴が学会報告「韓日大漁旗の比較研究」（2018）で明らかにしている。

Ⅱ－C：イワシをめぐる生活の変化

日本人漁民の朝鮮海出漁によってもたらされたイワシ漁が朝鮮の人々の生活に与えた影響については、呉が学会発表（2018）において詳しく報告した。呉はさらに論文「魚、漁業技術、民族習慣－植民地期の漁業経済構造に関する経済人類学的研究」（2020）において、魚食の嗜好と漁撈技術との関係を論じている。

Ⅲ：日本と東アジア諸国との新たな生活文化研究の枠組みの提示

本研究では最終年度に台湾の調査を行い、日本と韓国をフィールドとした近代の文化混交の研究を東アジア全域に発展させる可能性を模索する予定であった。しかし、Covid-19 の影響から、台湾調査を実施することができなかった。ただ、松田が学会発表「朝鮮海出漁研究の民俗学的意義とその方法」（2018）や論文「韓日の未来のための比較研究と展示」（2020）等をとおして、日本の帝国主義的拡大の時代における他の東アジアの国々との文化の混交を研究することの意義を提起し、研究方法についても議論している。

１年間の延長を含めて 5 年間におよんだ本研究の成果の概要は以上のとおりである。こうした成果は論文や学会発表として公表されただけでなく、研究代表者が所属する国立歴史民俗博物館と韓国国立民俗博物館が共催した国際企画展示「昆布とミヨク－潮香るくらしの日韓比較文化誌（韓国名「미역과 콘부-바다가 잇는 한일 일상」）」（韓国会場：2019 年 10 月 2 日～2020 年 2 月 2 日、日本会場：Covid-19 により中止）にも反映され、日韓の学界およびメディアから高い評価を受けた。展示にあたっては図録も刊行された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計17件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 川島秀一	４．巻 53
２．論文標題 ケンケン漁の始まりと伝播	５．発行年 2019年
３．雑誌名 東北民俗	６．最初と最後の頁 79-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松田睦彦	４．巻 249
２．論文標題 韓日の未来のための比較研究と展示	５．発行年 2020年
３．雑誌名 民俗消息	６．最初と最後の頁 16-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 磯本宏紀	４．巻 -
２．論文標題 伊吹島と朝鮮海出漁	５．発行年 2018年
３．雑誌名 韓日海洋民俗誌―韓日文化が交差する空間、海	６．最初と最後の頁 52-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 川島秀一	４．巻 -
２．論文標題 カツオ漁とかつお節の歴史と民俗	５．発行年 2018年
３．雑誌名 韓日海洋民俗誌―韓日文化が交差する空間、海	６．最初と最後の頁 84-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 呉昌炫	4．巻 -
2．論文標題 韓国南海のカタクチイワシ漁	5．発行年 2018年
3．雑誌名 韓日海洋民俗誌―韓日文化が交差する空間、海	6．最初と最後の頁 136-149
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 磯本宏紀	4．巻 -
2．論文標題 以西底曳網漁業における漁民の移住と定住化	5．発行年 2018年
3．雑誌名 地方史研究協議会第68回（徳島）大会成果論集　徳島の発展の歴史的基盤―「地力」と地域社会―	6．最初と最後の頁 52-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 磯本宏紀	4．巻 51（2）
2．論文標題 他地域への出漁漁民による奉納絵馬	5．発行年 2018年
3．雑誌名 民具マンスリー	6．最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 松田睦彦	4．巻 273
2．論文標題 海がつなぐ韓国と日本	5．発行年 2017年
3．雑誌名 民俗消息	6．最初と最後の頁 18-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 松田睦彦	4．巻 33
2．論文標題 カタクチイワシをめぐる日韓漁撈文化の混交に関する予備的考察	5．発行年 2017年
3．雑誌名 生活文物研究	6．最初と最後の頁 43-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 磯本宏紀	4．巻 33
2．論文標題 徳島県漁村部に残る植民地期朝鮮への出漁・移住記録―碑文・人物像・絵馬	5．発行年 2017年
3．雑誌名 生活文物研究	6．最初と最後の頁 85-121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 松田睦彦	4．巻 221
2．論文標題 明治16年「貿易規則」以前の朝鮮海出漁	5．発行年 2020年
3．雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6．最初と最後の頁 11-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 松田睦彦	4．巻 -
2．論文標題 名もなき人々の小さな日朝関係史－瀬戸内漁民の朝鮮海出漁	5．発行年 2021年
3．雑誌名 REKIHAKU	6．最初と最後の頁 8-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 松田睦彦	4．巻 53
2．論文標題 国際企画展示「昆布とミヨクー潮香るくらしの日韓比較文化誌」を終えて	5．発行年 2020年
3．雑誌名 民具マンスリー	6．最初と最後の頁 13-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 松田睦彦	4．巻 -
2．論文標題 旅に出て、ふるさとに生きる―人の移動の民俗学	5．発行年 2021年
3．雑誌名 和歌山県立紀伊風土記の丘開館50周年記念 令和3年度秋期特別展「海に挑み、海をひらく―きのくに七千年の文化交流史」シンポジウム「紀伊半島をめぐる海の道と文化交流」予稿集・論考集	6．最初と最後の頁 123-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 磯本宏紀	4．巻 -
2．論文標題 漁民の移動と定住をめぐる段階性―堂浦一本釣り漁民と九州・五島行き以西底曳網漁民の移動を事例として	5．発行年 2020年
3．雑誌名 人の移動からみた農山漁村―村落研究の新たな地平	6．最初と最後の頁 99-138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 磯本宏紀	4．巻 221
2．論文標題 朝鮮植民地期の日本人漁業経営の実態と展開―香川県観音寺市伊吹島、広島県坂町横浜出身ｎ漁業経営者を対象として	5．発行年 2020年
3．雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6．最初と最後の頁 25-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 呉昌炫	4．巻 221
2．論文標題 魚、漁業技術、民族習慣－植民地期の漁業経済構造に関する経済人類学的研究	5．発行年 2020年
3．雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6．最初と最後の頁 55-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計18件（うち招待講演　13件／うち国際学会　7件）

1．発表者名 松田睦彦
2．発表標題 日韓共同展示の意義
3．学会等名 中国海洋大学「日韓海洋民俗文化」系列講座（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 松田睦彦
2．発表標題 「日本朝鮮両国通漁規則」以前の越境漁業－日本漁民の朝鮮近海での漁の系譜
3．学会等名 International Conference Fishery Culture in Modern East Asia（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 昆政明
2．発表標題 日本の海事博物館の現状と課題－中国・韓国・日本の木造船建造技術の特徴と保存展示の視点から
3．学会等名 中国海洋大学「日韓海洋民俗文化」系列講座（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 磯本宏紀
２．発表標題 東シナ海における底びき網漁業と日本の食文化―グチをめぐる文化比較
３．学会等名 International Conference Fishery Culture in Modern East Asia（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 磯本宏紀
２．発表標題 漁民移住と定住をめぐる段階性―阿波堂浦一本釣り漁民と九州・五島行き以西底曳網漁民の移動を事例として
３．学会等名 日本村落研究学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 松田睦彦
２．発表標題 朝鮮海出漁研究の民俗学的意義とその方法
３．学会等名 国立歴史民俗博物館国際研究集会・日本民俗学会第901回談話会
４．発表年 2018年

１．発表者名 磯本宏紀
２．発表標題 朝鮮海への日本人漁民の進出と漁業経営―香川県観音寺市伊吹島と広島県坂町横浜の出漁漁民の事例から
３．学会等名 国立歴史民俗博物館国際研究集会・日本民俗学会第901回談話会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 呉昌炫
２．発表標題 カタクチイワシから見た20世紀韓国人の日常食生活の変動―韓国におけるカタクチイワシ漁業技術と消費方式の伝播と受容
３．学会等名 国立歴史民俗博物館国際研究集会・日本民俗学会第901回談話会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 昆政明
２．発表標題 日韓造船技術の混交
３．学会等名 国立歴史民俗博物館国際研究集会・日本民俗学会第901回談話会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 鄭然鶴
２．発表標題 韓日大漁旗の比較研究
３．学会等名 国立歴史民俗博物館国際研究集会・日本民俗学会第901回談話会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 川島秀一
２．発表標題 黒潮に運ばれた道―カツオ一本釣り漁の歴史と民俗―
３．学会等名 徳島県立博物館企画展「阿波漁民ものがたり」記念連続講座（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 昆政明
２．発表標題 日本と韓国の小型木造漁船
３．学会等名 釜慶大学校海洋文化研究所学術交流シンポジウム（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 磯本宏紀
２．発表標題 釣り漁師の移動ネットワークと変質―徳島県鳴門市瀬戸町堂浦漁民の事例を中心に
３．学会等名 日本民俗学会第73回年会
４．発表年 2021年

１．発表者名 昆政明
２．発表標題 船橋の海と漁業－木造和船の実測から
３．学会等名 船橋市郷土資料館令和３年度文化講演会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 昆政明
２．発表標題 日本列島の文化を支えた船
３．学会等名 海洋シルクロード国際学術大会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 川島秀一
２．発表標題 海から見た半島の民俗
３．学会等名 牡鹿半島・海と浜の民俗（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 川島秀一
２．発表標題 カツオ漁と紀州人
３．学会等名 特別展シンポジウム 紀伊半島をめぐる海の道と文化交流（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 松田睦彦
２．発表標題 旅に出て、ふるさとに生きる―人の移動の民俗学
３．学会等名 和歌山県立紀伊風土記の丘開館50周年記念 令和3年度秋期特別展「海に挑み、海をひらく―きのくに七千年の文化交流史」連続講座（国際学会）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計2件

１．著者名 National folk museum of Korea	４．発行年 2019年
２．出版社 National folk museum of Korea	５．総ページ数 323
３．書名 Miyok and Konbu : a voyage into maritime cultures of Korea and Japan	

１．著者名 国立歴史民俗博物館	４．発行年 2020年
２．出版社 国立歴史民俗博物館	５．総ページ数 309
３．書名 昆布とミヨク―潮香るくらしの日韓比較文化誌	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	島立　理子 (SHIMADATE RIKO) (00332354)	千葉県立中央博物館・その他部局等・研究員（移行） (82503)	
研究分担者	昆　政明 (KON MASAAKI) (10747182)	神奈川大学・国際日本学部・教授 (32702)	
研究分担者	川島　秀一 (KAWASHIMA SHUICHI) (30639878)	東北大学・災害科学国際研究所・シニア研究員 (11301)	
研究分担者	磯本　宏紀 (ISOMOTO HIRONORI) (50372230)	徳島県立博物館・その他部局等・専門学芸員 (86101)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	呉　昌炫 (OH CHANGHYUN)	韓国国立木浦大学校・人文大学・考古文化人類学科	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	鄭　然鶴 (JUNG YONHAK)	韓国国立民俗博物館・展示運営課	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
海がつなぐ日本と韓国―朝鮮海出漁と韓国の民俗変化―	2018年～2018年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
韓国	国立民俗博物館	国立木浦大学校		